

上三川 近代化の歩み

〜明治維新から戦前まで〜

殖産興業・富国強兵の基盤

〜東北本線の開通〜

明治時代の文明開化の象徴は、鉄道といつても過言ではありません。それまでの、どの陸上交通とも比較にならないくらい迅速に、そして大量に物や人が運べるようになったのです。

当初、明治新政府は国営で鉄道建設を計画しましたが、不況により断念しました。このことから、上野・青森間の鉄道計画も白紙に戻されましたが、岩倉具視などの尽力によって日本鉄道会社が設立され、明治17年に上野・前橋間の開業に続き、明治18年に大宮・宇都宮間が開業し、これにあわせて石橋駅も開業しました。しかし、路線の決定までには紆余曲折があり、当初、



石橋駅は上三川の玄関口でした
(写真：昭和29年の石橋駅)

取扱量3万8千tと、37年間で客数は37倍に、貨物量も54倍と、大幅に増加していることがわかります。大正5年と9年に石橋駅から発送された貨物の内訳は、米、麦類、石橋町に馬市場があった関係から馬、干瓢、薪の順で、その他にも、酒・煙草・繭・肥料・木炭・木材・石材などがありました。

このように、上三川町で育った人々や生産された商品は、石橋駅より全国、または世界へと旅立っていき、そして日本の近代化に大きく貢献することとなりました。日本の近代化を支えた東北本線、そして石橋駅は、現在の私達が持つ以上に、戦前の人々にとって玄関口としての大きな意味をもっていたことでしょう。

熊谷〜佐野〜栃木〜宇都宮という路線が考えられました。工費や営業収入、そして、仙台などの軍事拠点へ早く到着することを望んだ陸軍の要請から、大宮・宇都宮ルートに決定しました。開通当初は、栗橋・古河間の利根川に橋がありませんでしたが、上野・石橋間は利根川渡船を含ま

忘報短歌

百日紅実を結びつつ咲き果てて

残れる葉にも日々のうつろひ

稲葉 敬子

送りたるスイカの味が濃厚と

割る音迄も届く絵手紙

高田 幸子

若き日の合唱団の白ドレス

照れつつ気張るカラオケ発表

小島 キミ

釣れてよし釣れづともよし老い二人

里の小川に刻をすずしむ

沢谷 郁子

洗濯のかごに残りし一粒の

今年の粉を手の平へ取り

高橋ツギ子

手絞りの洗濯物を伝へ落つ

雫に水の命輝く

武藤 ひさ

風化とは哀しかりけり八月の

記憶の記事も少なくなりて

斎藤アツ子

河川敷夜空彩る花火見て

夏の終りと淋しさおぼゆ

井沢 和江

一ゆれのなびくのれんにみ魂かと

たまゆら思う一人居の昼

菊地 美代